

令和5年度 第1回埼玉県子供読書活動推進会議議事録

日時：令和5年9月29日（金）10時00分～12時00分

場所：ZOOMによるオンライン開催

出席委員：石川委員、菊地委員、金田委員、古川委員、三國委員、恩田委員、田中委員、
内田委員、石井委員、須田委員、今井委員 11名

欠席委員：小佐野委員

協議1 埼玉県子供読書活動推進計画（第五次）に向けた課題の整理について

委員から次の意見が出された。

（1）計画全体にかかる課題

- ・ 【今井委員】子供読書活動推進計画を策定するというのは努力義務だと思うが、市町村の温度差を感じてしまうところがある。第四次計画において、市町村の子供読書活動推進計画の策定率100%を目標値としているので、今後も、計画策定についてはしっかり努力していく必要があるのではないかな。
- ・ 【石川委員】不読率以外の数値目標も実効性の高いものにしていく必要がある。書店の数や図書館の資料費、図書館の貸出冊数なども参考となる数値になりうる。
- ・ 【石川委員】群馬県では子供読書活動推進計画ではなく、県民全体の読書活動推進計画になっている。埼玉県としても大人も本を読み続けていく、さらには世代を超えて読書活動を広げていくための施策や目標を考えるのが今後の課題ではないかな。
- ・ 【小佐野委員（事務局代読）】読書活動の習慣化は、「紙の本をこの期間に何冊読む・触れる」など具体的な目標設定がないと進まないと感じる。義務化されると子供たちも目標を達成しようと習慣化し、それが楽しさに結び付いていくのではないかな。
- ・ 【須田委員】県立高校の読書活動については高図研という高校司書のネットワークを中心に啓発してもらっている。県立高校における読書活動推進に向けた取組の実施率が令和4年度60.4%というのは非常に低い印象を受けた。

（2）取組にかかる課題

〈電子書籍など広義の読書活動の扱い〉

- ・ 【今井委員】不読率には電子書籍が含まれていない。社会の流れを考えると電子書籍を含めたほうがいいのかもかもしれないが、電子書籍市場における書籍の割合はわずかで、コミックや雑誌の割合が多数を占めていると聞いた。電子書籍を含めた場合、どこまで含めるのか議論の必要を感じている。
- ・ 【金田委員】2022年度の出版販売額が報告されている。約1兆6,300億円が出版推定販売額、そのうち紙の市場が1兆1,292億円（前年比6.5%減）となっている。一方、電子書籍では5,013億円（前年比7.5%増）となっている。電子書籍のうちコ

ミックは4,479億円となっており、電子書籍の90%を占める。紙の本と電子書籍の割合は70:30で電子書籍がシェアを伸ばしている。

- ・【須田委員】電子書籍のコミックの市場が伸びている理由として、無料配信が進んでいることもひとつの要因ではないか。無料配信で読む機会を与え、気に入ったら買うという、戦略的な要素があると思われる。
- ・【小佐野委員（事務局代読）】特別支援学校では本をめくる・本の質感を感じるというのも読書のひとつと捉えており、読み聞かせやパネルシアターなど、触れながら読むことが本来は大事だと考えている。デジタル化の進展という時代の流れの中で読書の意味付けをどう定義するのが難しいと感じている。

〈あらゆる子供への支援〉

- ・【恩田委員】放課後児童クラブ（学童保育）は大規模化になっているところも多くある。働きながら子育てをしている家庭も増えてきており、社会の中で、必要とされている場所となってきている。多くのご家庭の子供たちが通っている中で、子供それぞれに寄り添った読み聞かせが必要であると感じている。

〈読書環境の整備〉

- ・【恩田委員】地域の中でも本を紹介してくれる場所があるとよい。学童以外でも子ども食堂や放課後デイサービスなどでも気軽に本を読めるような環境の整備が必要である。
- ・【古川委員】子供たちがどこにいても本を手にすることが出来る環境を作っていくことが重要である。三芳町では、団体貸出以外にも図書館の廃棄本を学校や保育所、子ども食堂、教育支援室、学童児童館などにも配布している。
- ・【金田委員】全国の自治体の中で、新刊を扱う書店がない自治体数は456、1件しかない自治体数は334あり、全国の約半分（45%）の自治体に書店がないという状況になっている。なお、カフェとの併設や古書を含めた本の販売といった、独立系の書店は統計に入っていないので、新刊を取り扱う書店が減っているのは確かだが、本に触れられる場所がどれだけになっているかはわからない。

〈地域の担い手や協力体制の支援〉

- ・【田中委員】幼少期からの読書支援として、幼稚園では本の良さや楽しさを伝える工夫を行っている。図書館や地域と連携して、保護者への啓発として様々な場面で読み聞かせ等の取組を行っている。幼稚園では子供たちの心を落ち着かせるため、本への関心を高めるために毎日、帰りの時間に読み聞かせを実施している。
- ・【古川委員】三芳町では学校と中央図書館との連携が進んでいる。司書連絡会を月に1回開催し、各校に配置している学校図書館司書と中央図書館司書が協議、情報共有、

取り組み事例の紹介、研修などを行っている。学校図書館司書が中央図書館司書に相談する場を作るだけでなく中央図書館司書が各学校に出向くことで、学校や子供たちの様子を見ながらアウトリーチ的な支援ができています。この支援や連携が非常に重要で、三芳町が読書を推進する上で核となる部分と考えている。

- ・ 【三國委員】三郷市内の学校図書館に対する支援として、読書活動のための図書や学校の授業に役立つ資料の団体貸出を行っている。図書館司書が小学校3年生のクラスに出向いてブックトークを行っている。一人読みができ、ある程度深い思考ができる大人の読書に差し掛かるタイミングでブックトークを長年取り組んでいる。
- ・ 【菊地委員】家庭教育アドバイザーには講演会等を通じながら、子供たちと本との出会いを啓発していただきたいと考えている。今後は県立久喜図書館からの支援も受けながら、読書の重要性について研修していく必要があると考えている。
- ・ 【内田委員】本校の取組として読み聞かせボランティアがおり、保護者や保護者OBが月に一回各学級で読み聞かせをしてくれている。読み聞かせの本をポスターにして掲示することで、学校図書館の利用にもつながっている。子供が学校を卒業しても読み聞かせボランティアを継続していただいている人がいることで、脈々とボランティアの手法や選書が受け継がれている。一方で、年によってボランティアの人数が少ない時もあり、ボランティアの固定化や人材不足は課題といえる。

〈子供の読書に対する意識の変化〉

- ・ 【須田委員】図書館に足を運ぶ生徒が二極化しているという課題がある。調べものをスマートフォンで簡単に済ませて図書館には行かない生徒が多い。図書館が単に読書だけでなく、情報収集の場、情報の取捨選択を教える場所として活用できるように周知していく必要性を感じている。

〈発達段階に応じた支援〉

- ・ 【内田委員】小学校1年生にセカンドブックとして、市の図書館推進員が選定した本から1冊選んでもらって親子に渡すという取組をしている。親子で選書するというのも読書のきっかけになると感じている。
- ・ 【古川委員】三芳町では小学校1年生に司書が選んだおすすめ本を冊子にまとめ、プレゼントしている。

協議2 埼玉県子供読書活動推進計画（第五次）の骨子案について

委員から次の意見が出された。

(1) 不読率の低減

- ・ 【今井委員】不読率を下げるために、読書をする効果を客観的なデータで示せるというのではないか。読書はなんとなくいいものだ、という感覚的なものしか持っていない

い親に対して、親が子供の読書を支え続ける動機付けとなるようなエビデンスやデータを示し、ブックスタート等のイベントの中でお願いしていくという方法は非常にやりやすいのではないか。また、親が子供に本を読む姿を見せ続けていく姿勢が必要だと考えている。

- ・ 【石井委員】【内田委員】不読率を下げるための取組として、小・中学校では朝読書に取り組んでいる。朝読書にしっかり取り組んでいる児童・生徒の様子を見ると、落ち着いて学校生活が始められていることを実感しているため、取組は継続していきたい。
- ・ 【三國委員】不読率を下げるため様々な取組を行っているが、なかなか数値に結び付いていかない。子供の個性と適切な本を結び付ける、担い手が増えたり、(担い手の)スキルが向上したりすることで進んでいくのではないかと感じた。
- ・ 【石川委員】読書概念を拡張して捉える必要があると感じている。読書から拡張して、文字、言葉をどのように考えていくのか。それは話す、書く、聞く、人とのコミュニケーションにもつながる。
- ・ 【石川委員】本を読むことで、自ら情報を選んだり、フェイクニュースを判断したりという主体性につながると捉えている。

(2) 多様な子供たちの読書機会の確保

- ・ 【今井委員】県立図書館でりんごの棚を令和元年度に設置したが、現状、設置しただけに留まる。障害のない子への理解促進という意味合いもあるので、県内にさらに広がっていくべきではないかと考えている。県立図書館としても、研修会等を通して市町村の良い事例の紹介をしつつ、普及に努めていきたいと考えている。
- ・ 【石川委員】他県の事例ではみんなで車いすに乗ってみようとか、目隠しをして通路を歩いてみようとか、りんごの棚に設置された資料を使ってみよう、といった取組をしているところがある。また、認知症への理解を広める取組を行っているところもある。優しい資料(誰にでも触れられる資料)の普及はこれからの課題であるといえる。
- ・ 【三國委員】マルチメディアデイジーの普及のために、市内の学校の支援級に通ったが、なかなか普及していかなかった。発達障害、識字障害など、個々の状態はそれぞれである。デジタルにすることで読書が容易になる子供もいる。それぞれの子供の特性に合わせた資料を用意し、オーダーメイドの支援が必要になっていくのではないか。啓発することは大事だが、実際の多様な子供たちとの結びつきは難しく感じている。
- ・ 【小佐野委員(事務局代読)】特別支援学校の実態として、ICT化や、働き方改革の流れの中で、教員が本や絵本に深く向き合う、教材研究をするという事が少なくなっている。絵本を用いて魅力的な教材を作るノウハウを身につけるような、実践的な研

修を受けることが少なく、電子教材に流れる事で、図書離れが加速しているように思う。まずは、教員支援が必要ではないか。

- ・ 【恩田委員】働いている保護者も子供が幼児期には、一緒に本を読む機会をつくるように努力をしているご家庭も多いが、子供が小学生になるとその割合はうんと減ると思われる。子供が低学年のうち、保護者が一緒に楽しむことも時には必要だと思うが、保護者の日常は忙しく、とくにシングル家庭は、保護者自身のゆとりもない。放課後児童クラブ等で、行事の中に親子で本に触れ合えるような機会を設ける、また、保護者会などで保護者に改めて親子で読書をする事の良さを伝える取組等をしていけば、保護者自身が家庭の中で、親子で本を読んでもというきっかけになるのではないか。
- ・ 【須田委員】生徒が子ども食堂のボランティアに参加した。子ども食堂には多くの子供が集まっているので、そういった場の本が提供できると読書の向上につながるのではないか。

(3) デジタル社会に対応した読書環境の整備

- ・ 【須田委員】高校では、学校図書館がグーグルクラスルームを活用し、生徒向けにイベント等の情報を積極的に発信しているところもある。
- ・ 【菊地委員】【石川委員】読書推進の対象としてオーディオブックを活用した耳で聞く読書にも視点を広げてよいのではないか。

(4) 子供の視点に立った読書活動の推進

- ・ 【石井委員】【須田委員】【古川委員】ビブリオバトルは中学生・高校生ともに好評である。公共図書館で大人を対象としたビブリオバトルから子供を対象とした大会に発展した事例もあり、こちらも好評であった。
- ・ 【金田委員】10月27日から11月23日まで開催される「BOOK MEETS NEXT 2023」のイベントのひとつに11月8・9日に京都で行う「KYOTO BOOK SUMMIT」がある。このイベントでは、学生が企画の主体となって、声優による読み聞かせや本の紹介などを行うと聞いている。
- ・ 【石川委員】アニメや映像から関心をもって、原著にあたっていく学生も多い。コミックの編集者の立場での講演会も好評だったと聞く。
- ・ 【須田委員】高校では、図書委員会の企画でポイントカード制が始まったところもある。図書館で本を借りてポイントを貯めると特典がもらえる、といった取組を通して図書館の普及率を上げたいという狙いがあるようである。

(5) 地域と連携した読書活動の拡大

- ・ 【古川委員】国の計画を受けながら、更に埼玉県独自として地域と連携した読書活動

の拡大を加えることで、良い計画に仕上がりそうな期待がある。

- 【恩田委員】学童のイベントで地域の読み聞かせボランティアを探したがなかなか見つからなかった。どんな団体がどのような活動をしているのか、地域ごとに簡単に調べられる統一された窓口があると良い。
- 【田中委員】民間団体との連携が入ると良い。幼稚園では、大型絵本を民間企業から寄贈いただいた。大型絵本は絵を見て自分でお話を考えるという想像性を広げることできるので、そういった形で寄贈いただいた本を活用している。
- 【菊地委員】埼玉県は各市町村の図書館が充実しているが、隣接している自治体への貸出が可能であることは意外にもあまり知られていない。広域貸出に対応していることをPRしていくことも必要ではないか。